Phantom Quest SpinOff-03.

［二番手俳優の話］

いつだったかな。多分 5.6 歳の頃だ。
移動遊園地に遊びに来ていた時、野外ステージで見た舞台との出会いが僕の何かを変えた―…。

それはおそらく 30 分程度の短い演目で、歌と踊りが入ったいわゆるミュージカルだったと思う。
僕の右隣には母さん。左隣には父さんが座っていた。
上機嫌の両親が声を上げて笑い、何度も拍手を送っていた。
帰り道、耳に残った歌を口ずさむと両親が驚いたように僕を覗き込んで言った。
「アウラ、お前は天才だ」「天使の歌声だ」と。
親バカもいいところだとわかっている。それでも、僕はそれが心の底から嬉しかったんだと思う。

両親はいつだって忙しそうだった。テクスマ染めという古くから伝わる伝統染物の継承者である父。王家や貴族からも注文を受けていると聞いた時は、父が少し遠い人に感じたのを覚えている。職人の父と店の経営を担っている母。一人っ子の僕。そして［兄］。
父の弟子として住み込みでテクスマ染めを学ぶエルマという僕の 13 歳も上の［兄］と呼べる存在がいるのだ。
褐色の肌をした物静かで穏やかな人だった。
大陸の一番南に位置するメリディエという小さな国の出身で、出稼ぎにテラ王国に来た際テクスマ染めと出会い虜になったと言う。「弟子にしてくれ」とエルマが我が家の門を叩いたのは、僕が 3 歳の時だったと聞いた。父は二つ返事で Yes とエルマを受け入れた。ずっと世襲で受け継がれてきた伝統を崩すのか？と当時は反対する声もあったようだが、エルマのひたむきな姿と目まぐるしい成長に、今は文句を言う者は誰もいない。自慢の［兄］だ。
つまり僕は 3 歳の時、『家業を継ぐ』以外の選択肢を得たわけだ。
物心ついた頃から父の跡を継ぐのはエルマだと疑っていなかった。僕だけじゃない。誰もがそう思っていただろう。それほどにエルマは優秀だった。
僕はそのことを心のどこかでラッキーだと思っていた。だってそうでしょう？　決められたレールの上を進まなくていいんだ。
でもその反面…。
いや、何でもない。

平和で穏やかな学校生活。
勉強も運動もそこそこできた。器用なのは父親譲りだ。
友達や先生たちとの付き合いも悪くない。交渉上手は母親譲り。
もともと何に対しても慎重な僕が大きな失敗を犯すわけもない。

経済的にも恵まれ家族にも愛され、何一つ不自由ない生活。
不満なんて…あるわけない。
でも、いつだって僕の頭（いや、心かもしれない）にはあの日光景が焼き付いていた。
両親との楽しかったひと時。あれ以来両親と共に舞台を見る機会はないままだ。
芸を生業とするのはどういう訓練が必要なのだろう？
旅一座の生活というものは一体どんなものなのだろう？
たまにそんなことを考えていたが、誰にも相談したことはなかった。
笑い声と拍手。観客の視線を釘付けにする夢の世界。
心の何処かでずっと何かを燻ぶらせたまま、何不自由ない僕の生活は続いていく。
エルマが初めて一人で仕上げた染物が父を唸らせたのは、その頃だった。
父はエルマに太鼓判を押した。お前になら、全て任せられるよ。

僕は間もなく 16 歳。何を、してきたんだろう。

父の前で、珍しく顔を綻ばせたエルマが疎ましく見えた。
そんな資格ないのに。

×　×　×

「一緒に行きませんか？」
エルマが誘ってきた時、僕は意味が分からなかった。
エルマは二枚のチケットを差し出してきた。
最近テラ王国にやってきた旅一座の芝居のチケットだった。
「え？」
「僕一人で仕上げた染物が初めて売れたので、お手当をいただいたんです」
エルマはずっと僕に敬語だった。13 歳も年上なのに。
「アウラは、舞台好きですよね？」
「なんで」
「たまにテラタイムズの芸能欄、切り抜いていますよね？　舞台に関する記事がほどんだ」
「……」
優しい問いかけなのに全てを見透かされたようで、僕は怖くて目を背けた。
自分がこんなにも臆病だとは思わなかった。ちょっと足をのばせば観に行ける距離に旅一座が来ることは何度もあった。観に行く機会は何度だってあった。でも、行かなかった。
観たら最後。…心のどこかでそう感じていた。予感があった。
誰にも言ったことがない、心の中で膨らみ続ける想い。
それを、この兄には見透かされていたのだと気付いた。
「一緒に行きましょう？」
エルマの声はいつだって穏やかだ。

「[兄] らしいこと、一度してみたかったですよ」
そんなこと言われたら、うなずくしかないじゃないか。

×　×　×

内容は一言で言うと悲劇だった。儚い恋の物語。ちょっとだけ泣いたのはきっとバレていないと思う。
道化師が歌うテーマソングが耳に残った。
帰り道、ふと口からこぼれる。
「アウラの歌好きです。たまに部屋から聞こえます」
「…もう歌わない」
「どうして。もっと聞きたいという意味で言ったのに」
「……」
訪れる沈黙。
静かな虫の声が夜が始まったことを教えてくれている。
耐えられなくて口を開いたのは僕だった。
「ねえ…」
「なんです？」
「おめでとう」
「…え」
「父さんがエルマを正式に跡継ぎに任命したって聞いた」
「……はい」
エルマは真っすぐに僕を見た。が、僕はなぜだかその目を見れなかった。
「だから、おめでとう」
そんなつもりはないのにぶっきらぼうに響く声を許してほしい。
「……」
エルマの肩が震えているのが見えた。
「…！」
エルマは、泣いていた。
「なんで泣くの？」
エルマは柔らかく笑って言った。
「嬉しくて」
気が付くと僕はエルマの褐色の腕に抱きしめられていた。エルマからはよく知っている染液の匂いがした。僕の家の匂い。そうか。これが兄貴の匂いなんだと妙に納得した。
それからエルマはポツリポツリと語り始めた。
ずっと僕に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだったこと。本来なら僕が座るべき椅子を横取りしたようで申し訳ないと。
僕は首が引きちぎれるんじゃないかってくらい首を振った。
そんなことはない！

僕は、僕自身がただ燻ぶっているだけなのだ。
父を信頼の全てを注がれるエルマが羨ましくて拗ねているだけの、子供。このままじゃ嫌だ。
「エルマ…。うちの門を叩いた時、どんな気持ちだったの？」
ふとそんなことを聞いてみる。
「そうですね。あまり覚えていません。多分考えてはいなかったんだと思います」
「え？」
「Nunc aut numquam.　私の地方に伝わる格言です」
「意味は？」
「今成すか。永遠にやらないか。…心赴くままに。あの時私は自分の心にだけ従った…」
僕はエルマを真っすぐ見て言った。

「僕、やりたいことがあるんだ」

そして今来た道を引き返した。走って走って…。
もう人気がすっかりなくなったテント小屋。ついさっきまで活気に満ちていたのに今はなんだか寂しいくらいだ。
入り口に背の高い青年が立っているのが見えた。
「あの！！」
勇気を振り絞って声をかける。
「はい、なんでしょう？」
高くて少しのんびりしたトーンで答えが返ってきた。
「あの…その…。旅一座ってどうやったら入れるんですか？」
「…え？」
「何にもわからないんですけど興味があって…その…」
言う内容をちゃんと考えて来るんだった。勢いで飛び出すなんて僕らしくない。
「今の公演を見て下さったんですか？」
「はい」
「あの、明日も見に来ませんか？」
「え？」
「明日の昼…僕が初めて脚本を書かせてもらった作品が上演されるんです」
「あなたが書いた脚本？」
「はい。まだ全然見習い中なんですけど、明日の昼一回だけ。お試しって感じで上演させてもらえることになって…」
「来ます！！」
「本当に？」
「約束します！！」
「嬉しい！！！」
青年は勢いよく僕に近づいてきた。もはや覆いかぶさってきたと言ってもいい。

「海賊ものの冒険奇譚なんですよ。後半の殺陣が見どころで…！！」
あまりにも勢いが良かったものだから、思わず尻もちをついてしまった。青年もそのまま倒れ込んでくる。
「うわぁ！！！　すみません！　大丈夫ですかぁ？！！」
お尻は確かに痛かったけど、なんだか笑いが込み上げてきて止まらない。
一瞬きょとんとしていた青年もつられて笑った。
それから二人でひとしきり笑い合った…夜の始まり。旅の始まり。
夏の訪れを告げる湿った風が吹き抜けるのが、気持ちよかったことは今でも覚えている。

×　×　×

「んで、翌日の公演見てバルト一座に即入団ってわけ？」
列車の走行音がリズミカルに響く中、ディアナはどこからかくすねてきた酒に舌鼓を打つ。
「いやいやそんな急には…。そこからちゃんと両親を説得して、学校にも休学届を出して、まずは試験的に入団させてもらって…」
「はあ？　なにそのなまぬるーい入団秘話。俺は即決だったよ」
「あなたはそうでしたね。『俺はディアナ。今日からバルト一座に入りまーす！よろしくお願いしまーす！』って…誰も許可してないのにそこからずっと入り浸って、気が付いたらコレですよ」
「『すぐに看板俳優にのぼりつめまーす』って有言実行した俺って偉い」
「嫌味ですか？」
「あれぇ？　アウラ先輩じゃないですかぁ…ぃってぇ。暴力反対！」
「あなたの言葉を借りるなら、僕の心は大怪我をしてます。血ぃだらだらですよ。あなたのせいで！」
「ほんとだ。まっかっか！」
ディアナは僕の胸元を指さして言った。赤い、僕の一張羅。
「本当いい色だよね。こんなに鮮明な赤い色って俺見たことなかったもん。普通さ、もっとくすんでんじゃん？」
「赤は、一番染まりにくい色なんですよ。この色を出せるのはテクスマ染めの特徴です。それもここまで鮮明な赤は」
「相当腕がいいんだね。アウラのおにーさん」
「……」
「おにーさんでしょ？　その赤に染めたの」
「…はい。餞別にってエルマが染めてくれて、母が仕立ててくれました」
「いーね！」
ディアナは本当に心のままの言葉を発してくる。
それがたまにくすぐったくて、こそばゆい。
「で？　正直どうなのさ？」
「何が？」
珍しくディアナが口ごもる。コップの端を舐めながら言葉を選ぶのはディアナの癖。

「…未練とかなかったわけ？　ほら俺には跡取りとかそういうの全然わかんないんだけどさ」
「……」
一瞬呆気にとられたけど、すぐに理解した。
ディアナなりに気を使ってくれているらしい。
僕は目を細めた。
「…ない、と言ったら嘘になりますかね。跡取りってことより、父の手伝いが何もできなかったことが。少し不甲斐ないって言うか…。まあ、そのための努力を何もしていないので、僕には何も言う資格はないですけど」
「かったいよなぁ」
「は？」
「そーゆーとこだよ！アウラ君」
「なんですか？」
「『お父さんの一番になれなくて超くやしー！！　でもそのおかげで今好きなことやれてて超ラッキー！　だからプラマイ０！！！　ひゅ〜〜！』ってくらいのこと言ってみな？」
「…言いませんよ。そんなこと」
ディアナが車窓から景色を眺める。もうすぐ山を越える。
「お、もうすぐ山越えそうじゃん。懐かしい？」
ふとディアナが聞いてくる。
「もうちょっと先ですよ。僕の町は」
「両親は？　見に来てくれるって？」
「どうでしょう？　忙しい人たちですからね」
「きっと来るよ」
「……あなたが言うとそんな気がします」
車窓からのぞく空のその先に、僕が生まれ育った町がある。そこには両親と兄がいる。
凱旋と呼べるだろうか…。いや、まだだ。僕は…
「一番に…なりたかったのか、僕」
思いが口から出ていたことに気づいた時は遅かった。
「あ、いや、何でもないです」
「お父さんの？　それともバルト一座の？」
「……」
こういう時ディアナは絶対に目を逸らさせない。逸らせない何かがある。
「どっちもですよ」
もうヤケだ！と睨みつけるように言い放ってやる。
「へえ。めっちゃいい顔するじゃん」
「え？」
「舞台上でもあんまり見たことない、本気の顔」
「僕はいつでも本気ですけど？！」
「そーだね。本気であろうと頑張ってるよね」

「どういう意味ですか？」
「本気ってさ、多分…、なろうと思ってなるものじゃないんじゃない？　気付いたらなってるんだよ」
「……」
その時車内アナウンスが僕の町の名前を告げた。
「アウラ…？」
戸惑ったような声がすぐ近くでした。
「どーして泣いてんのさ？！　ちょっとぉ…」
あのディアナがオロオロしていて笑える。
「二人とも、もうすぐですよ…って、え？　アウラ君？！　どうしたんです？　ディアナ君！何をしたんですか！」
「いや、俺は何もしてないと思うけど…」
「君がそう言う時は何かをした時なんだってそろそろ自覚した方が良いと思いますよ」
「え〜。どういうこと？！」
僕の頭の上で言い合いするのはやめて欲しい。
「…ふっ」
ああ、この感覚知ってるなぁ。笑いが込み上げてきてたまらない感覚。
そういう時はいつだって頭よりも先に心が動いている時なんだ。
僕が泣きながら大笑いするもんだから、でっかい二人は不思議そうな顔をしている。それが何とも間抜けで、僕の笑いはしばらく止まることがなかった。
「さあ、行きましょう」
思う存分泣いて思う存分笑った僕がそう告げると、
二人に頭をどつかれた。
「なーにスッキリした顔してんだよ」
「スッキリしましたからね〜（笑)」
僕は二人を置いて先に列車を下りた。
ただいま。僕の町。

「何があったか知りませんが、本番が楽しみですね」
ドルイドがそう笑って、
「っしゃー。俺も飛ばしていくぞぉ」
ディアナが雄叫びを上げた。

ディアナが仕掛けたアドリブで、一番のクライマックスシーンを担うのがディアナではなく僕になったって話は今後バルト一座で語り継がれ続けることになるけど…、それはまた別の話。
それは果たして破壊行為だったのか？
それとも、ファインプレーだったのか―…？

SpinOff- 03.　fin.